2　中国の古典医書にみられる医者の身分と治療について

山本徳子

『黄帝内経霊枢』によると、刺鍼して治療するときの考慮として、次のように記している。すなわち、

上工は、病気が、まだ生じないものを刺す（未病を治療して已病を治療しない）。その次は、病気が、まだ盛んにならないものを刺す。

その次は、病邪が衰えたものを刺す。

下工は、病邪が襲ってきたものや、その病状が盛んになったもの、その病と脈の合わない逆のものを刺す。（第55）

とあって、治療者に四ランクある。また、脈状から総合的にみて、病状を察して診断する者が上工であって、十のうち九を全うする。中工は十のうち七、下工は十のうち六だという（第4）。そうすると前掲の上工・その次・その次・下工とあるのは、間の二者を中工とみなすこともできよう。

ともあれ、病気に対して、上工は未病もしくは病気の芽がめばえるときに、それをとめてしまうし、下工は病気になってしまってから、その病症を知るので完全に病体となったのを治療する（第73）ということが、はっきりしている。同様なことは『素問』にもみられる（第26）。

これが、唐代（618～907）になると、むかしの上手な医者について、孫思邈は『備急千金要方』に次のように書いている。

上医は、いまだ病まざる病を医し、

中医は、病まんと欲するの病を医し、

下医は、すでに病める病を医す。

また、「上医は国を医し、中医は人を医し、下医は病を医す」ともある。これによると、はっきりしているのは〝下医〟であって、已病を治療するのだということである。

こういった医師のランクづけから知られることは、上・

中・下の身分もさることながら、早期治療や予防医学的な考え方のあったことであり、これこそが病気に対して、そして、生きる者の理想であったものと解される。

こうした医者たちの治療内容を考察する。

（横浜市立大学医学部医史学教室）

3　三巻本『本草集注』と出土史料

真柳　誠

斉梁間の陶弘景（四五六～五三六）が編纂した『本草集注』は、中国主流本草の根幹を築いた書である。のち唐政府により七巻本の本書を核に増補した『新修本草』が勅撰（六五九）されるまで、本書はかなり流布したらしい。しかし本書自体の現存は少なく、敦煌で総論部分の序録・巻一（龍谷大学所蔵）と、トルファンで各論の動物薬部分・断簡（ベルリン国家図書館所蔵）が発見されているにすぎない。

この原資料の少なさゆえ、本書の成立と巻数との関係については、かねてより多くの議論がかさねられている。代表的論文には以下のものがある。

①高橋真太郎「神農本草経に就いて」（『日本医史学雑誌』